

『かんかん虫』（有島 武郎）考

吉 田 俊 彦

はじめに

安川定男氏は、山田昭夫氏の^{注(1)}着目された明治三十九年一月三日の日記の記事「夜は図書館に至る勇氣なく『合棒』の稿を脱す」という中の『合棒』を『かんかん虫』の初稿と見なされ、^{注(2)}「『合棒』↓明治四十年浄書の第二稿↓『白樺』に発表の成稿」という三つの段階を推定されている。『合棒』の原稿が現存していないため、その内容を具体的に検討することはできないが、第二稿末尾の「明治三十九年於米國華盛頓府、明治四十年（一九〇七）六月於麴町浄写」という記事と明治三十九年一月三日付の日記内容を^{注(3)}を照応させてみる時、『合棒』を初稿とする山田、安川両氏の推定は、否定しがたいものと考えられる。なお、「明治四十年（一九〇七）六月於麴町浄写」という文言が、脱稿時期の直後に連記されているところから推して、明治三十九年脱稿の初稿と明治四十年浄書の二稿との間には、大きな改作経緯はなかったといえよう。

この小論では、こうした三段階の形成過程を前提とし、まず、二稿の劇構成を支えているゴリキーの『センツアマニ』の影響面を捉え、次いで、二稿と定稿との間に認められる本質的な差違を整理し、最後に、定稿において改稿を余儀なくした人間有島の生の苦悩を尋ねてみたい。

一 『センツアマニ』の影響^{注(4)}

『かんかん虫』におけるゴリキーの影響を最初に指摘したのは中村星湖であ

る。

《有島武郎氏の『かんかん虫』（白樺）場面が外國的な為かエキゾチックの匂の強い、ゴリキーあたりの作風で巧みさは一層立勝つて居る程である。》

本多秋五氏は、題材、手法の面に着目され、『かんかん虫』がゴリキーの初期の作品に酷似していることを指摘^{注(5)}されているが、この本多氏の見解は、山田昭夫氏^{注(6)}によって、さらに具体的に検討が加えられていくのである。

《本多・西垣両氏ならずとも『かんかん虫』がゴリキー作品に酷似していることは疑問の余地がない。作品の舞台・人物・基調など、余りにもゴリキーなのである。何か一編を挙げるなら初期の代表作「チュルカッシ」を想起したい。チュルカッシは、港に碇泊中の船を目当てに大胆不敵な泥棒を働く浮浪人仲間の顔役だが、どこかに魂の純潔さを窺わせる魅力のある男である。このチュルカッシの体臭と「かんかん虫」の諸人物の体臭は同じである。》

このように、『かんかん虫』に見られるゴリキーの影響については、これまでに、幾人かの人達に注目されてきたことであるが、舞台、人物、劇展開、手法などの面から見ると、『センツアマニ』との類似性は見逃せない重要な特徴と考えられる。まず、二稿と『センツアマニ』との類似性に着目してみたい。

第一の類似は、劇舞台が「海岸べり」に設定されていることである。季節と時間が全く正反対のため、具体的な海の情景は自ら異なっているが、その対極性には、意外に緊密な類似性を認めることができる。

《島は深い沈黙の中に眠つてゐる。海も死んでゐるかと思はれるやうに眠つてゐる。（略）／遠くから此島を見れば妙な形をしてゐる。遠くからと云ふのは天の川の黄金色をした帯が黒い海水に接した所から見るのである。そこから見れば、此島は額の広い獣のやうである。》（センツアマニ）

《モネーの画を其儘、海も空も人も船も、熱い鮮やかな色彩に映えて、其几てを真夏の光が押し包む様に射して居り、昼弁当時の太陽は最頂、物の影が小さく濃く、夫れを見てすら眼が痛む程の暑さである。》（かんかん虫、二稿）

『センツアマニ』の描写が、「闇」に包まれた「島」の深い静けさを動物的イメージに吸引していく沈鬱な静的感覚に支配されているのに対し、二稿の描写は「光」に包まれた「海面」の明るい動きを無機質的光彩に定着していく瀾達な動

的感觉に支配されており、この対極的な特性は表裏の関係で重なり合うものである。

第二の類似は、海べりに腰を下ろす二人の人物の対話によって物語を進行させていく形式である。『センツアマニ』における対話者は、税務署付の「兵卒」と「漁師」の二人であり、二稿における対話者は、船の錆落しの労働者「吉」とその弟分の「自分」の二人である。話し手の「漁師」と「吉」の共通の要素が生活経験の深さであるのに対し、聞き手の「兵卒」と「自分」の共通の要素は若さである。

第三の類似は、相愛の男女の間に割り込む男の特性と悲惨な結末である。

『センツアマニ』の中心話題の女主人公・ユリアは「貧乏な鍛冶職の娘」であるが、「お宗旨を信仰してゐる」「利口者」である。男主人公・カルロネは「物持」の家の息子で「雷のやうな声をする」「大男」の愚直者である。この相愛の二人の間に割り込むアリスチドは「狡猾な」知恵者である。ユリアを「疵物」にし「手に入れる」悪知恵を思いついたアリスチドは、葡萄島で働いているユリアを悪知恵の罠にうまくはめるが、愚直なカルロネの心を騙しきけることはできず、結局は、彼に殺害されることになる。

二稿の中心話題の女主人公・里は、貧乏な船の錆落しの労働者「かかん虫」の娘であるが、純一な心を持った器量よしである。この里を愛する「かかん虫」の富は、すべてが「気味の好い程小じんまりして、鼻筋の通った眉頭の近い」江戸っ子の典型であるが、逆るばかりの野性」を備えた「肝癩玉」という渾名の男である。この相愛の二人の間に割り込む蓮田は「土左衛門見て一な、ブクブクした面」を持つ会計係の男で、どこまでも「皮を被」ろうとする見栄張りである。蓮田は金の力によって里を妾にすることになるが、野性的な愚直さを持つ富は里を「匕首」で刺し、また、船の錆落し工事の「検査に來た」蓮田を「ツク鉄」で殺害するのである。

第四の類似は、作者の共感する中心人物の特性と主要テーマである。

カルロネが「物持」の家の息子であるのに対し、富は貧しい錆落しの労働者であるが、共に、愚直なよさを持つ男である。「雷のやうな声をする」「大男」で「知恵は無い」カルロネに対し、富は「逆るばかりの野性」を備えた「肝癩玉」

である。この人物的特性は、カルロネ、富の愚直な特性を際立たせる重要な力となっている。作者は、この愚直な男の生き方に共感しているのであり、『センツアマニ』と二稿の主要テーマは、共に、愚直な男の純一な愛を描くことにあるといえよう。

このように、二稿と『センツアマニ』の間には、重要な共通性を見出すことができるのであるが、勿論、大きな異質的要素のあることも否定できない。

第一は、男主人公の生き方に対する聞き手の反応の相違が挙げられる。『センツアマニ』の聞き手の兵卒は、語り手の老人が共感するカルロネの生き方に批判的である。「その話はわたしは好かないね。そのカルロネと云ふ男は野蠻で、ひどく馬鹿だ」と兵卒が言い切る時、語り手の老人と聞き手の兵卒との世代的差違が鮮明に浮び出てくるのである。老人が「精神的・理想的・内向的・内容的・思念的・永続的・創造的・全身的で純粋性を志向するのに対し青年は、肉體的・肉体的・現実的・外発的・形式的・行為的・瞬時的・所与的・遊戯的で、その性情においてやや純粋性に欠ける」のである。二稿の有島はこうした世代的差違を抑え、階級的差違に置き換えようとしている。この階級的差違を浮び上がらせる形象過程には、恋愛問題を情念の世界に封じ込めることのできない有島の社会的関心が、当然作用していたと見てよからう。

第二は、二稿の人物造形が、『センツアマニ』とは異なり階層性を生かす社会的視点からなされていることである。

《御前さん手合は余り虫が善過ぎまア、日頃は虫扱ひに碌々喰はせもしねーで置いて、そんならって虫の様に立廻れば、矢張り人間だと仰る、ハイハイと源水の手間取り見て一に温順しくしては全く顎が干上ります、旦那エ、貴方も月に九円か十両じゃ、己ツち初めお察し申しますが、誰れもお察し申して呉れ無え己ツち等の境界では、お目出度い顔をして一日立ン棒をする様な呑気な真似は出来ません、働いて取る外は無え、偶にや荒ッぽく働いたつて、旦那夫りや仕方が無えや、》

これは、語り手の吉が、仲間の八と争いを始めた時に顔出しした巡查に向って吐き出すセリフであるが、吉の「虫」意識は、社会の不合理をきびしく裁く批評意識に支えられたものである。吉が娘・里を妾にしようとする蓮田への思いを語

る言葉に注目してみる時、吉の「虫」意識が意気地ない自己卑下として終るものでないことは明らかである。

《カンカン虫手合で懼がられが己らでよ、太腐れが富だ。二人とも字は読め無えがネ。／二三年以来、里の野郎と訳があるとは感付いたが、(略)放抛かして置いたのよ。／すると去年の春だ、会計係の蓮田が里を妾にし度と、頭から被さつて来やがった、(略)カンカン虫の娘たア云ひながら、箱人物を慰もうとは、……業が煮えてよ、エ、しやッ面に吹きかけて呉れようと、喉から睨まで搾つたんだがね、其奴を傍へ吐いて、「へーそんな訳で」と空嘯いた己らの腹も白かア無え、全くだ。／だが夫れも全然欲徳づくから計りじやア無えんだよ、義理人情を勘定に入れ無えのが当世なら、左様行くのが条理じや無えか親が妾をして娘が肥る程食やア、生きるが者はあると積つたのよ、(略)／此処で己りや人間の持てる金つて奴を、思ひきり巻上げる度胸を据えたと思ひネい。》

「此処で己りや人間の持てる金つて奴を、思ひきり巻上げる度胸を据えた」という吉の決意には、蓮田という一人間の個人的性格を超えたものへの憤怒が爆発点に達しているといえよう。この個人的性格を超えたものというのは、「虫」階層の対極にある「人間」階層のことであり、より具体的に言うならば、船の錆落しをする貧しい労働者を「日頃は虫扱ひに」しておりながらも、口先では「人間だ」と認めたりなどする「人間」階層の欺瞞性に外ならない。

吉と富は、里を不幸にした元凶・蓮田を共通の仇として結びつく前に、すでに、「字は読めない」「かんかん虫」という同じ階層性により結びついているのである。こうした階層性に基づく人間関係は、語り手の吉と聞き手の自分との間にも認められる。自分は字が読め、吉は字が読めないという一事によって、自分と吉の関係には、吉と富の間には見られない懸隔状況が生じている。

『センツアマニ』のゴリーキーが、語り手の老人とカルロネの結びつきに、カルロネの「胸の底にある」「正直な人間の料簡」への共感を力とし、そして、語り手の老人と聞き手の兵卒の懸隔は世代的な差違を要因としているのに対し、二稿の有島は、吉と富の結びつきも、また、吉と自分の懸隔も、階層性に基づく社会的視点によって統一しているのである。

このように、二稿における有島は、社会の不合理を裁く批評精神を働かせ、階層性に基づく社会的視点によって人物造形を統一しようとしているが、二稿から定稿への改作を企図する有島にとって、構造的な不合理を持った社会問題は、より強い形象モチーフになっていったといえるのではなからうか。瀬沼茂樹氏は、二稿と定稿との異同について、「富と吉との間柄が第二稿では人情本式に扱われ、刃傷沙汰まで招いているが、定稿では専ら蓮田(グリゴリー・ペトニコフ)への復讐を強調する方向に整理してあるといつてよい。この点で定稿は意図が明確化されている」と述べておられるが、「復讐を強調する」形象意図は、この社会的関心事と無縁のものではなからう。ここで、二稿と定稿との本質的な差違に注目してみたい。

二 二稿と定稿との本質的差違

山田俊治氏は、二稿と定稿との本質的な差違について、いくつかの重要な提示をされているが、ここでは、その中の一つ——「積極的にへ虫への人間」への反抗を論理化し「へ論理」によって凶行に結びつけ」ていく定稿の位置づけを手掛りに、二稿と定稿との間の本質的な差違を具体的に確認しなおし、そして、出発期における有島の実生活と認識志向がそれらとどのように関連しているかを尋ねてみたい。

第一に、吉(定稿、ヤコフ・イリツチ)と談議する巡査の設定意味の明確化が挙げられる。

《巡的だつてあの大きな凶体ぢや、飯もうんと食ふだらうし、女もほしからう。『お前もか、己れもやつぱりお前と同じ先祖はアダムだよ』とか何とか云つて見る。己れだつて粗忽な真似はし無えで、兄弟とか相棒とか云つて、皮のひんむける位えにや手でも握つて、祝福の一つ二つはやつてやる所だつたんだ。誓言さうして見せるんだつた。それをお前帽子に喰着けた金ぴかの手前、芝居をしゃがつて……え、芝居をしゃがつたんだ。／己れにや芝居つてやつが妙に打て無え。』(定稿)

二稿における用語「巡査」を「巡的」に変え、しかも、「帽子に喰着けた金ぴかの手前、芝居をしゃがつて」という二稿には見られない端的な言葉によって、

巡査の權威主義と欺瞞性を批判する定稿の有島は、二稿よりも明確な告発的視点を獲得したといえよう。巡査に同じ階層性を感じ取り、「旦那エ、貴方も月に九円か十両じや、己ツち初めお察し申します」という吉の同情的セリフが定稿において抹消されたのは、当然の成り行きであったといわなければならない。

第二は、「耶穌の別嬪二人」（定稿、尼寺の尼二人）の行う説教に対する吉の反応の変化である。

《お前つちは字を読むからには判るだらう。人間で善をして居る奴があるかい。馬鹿野郎、ばちあたり。旨い汁を嘗めつこをして居やがつて、食ひ余しを取るとき物の様に、お次ぎへお次ぎへと廻して居りや、それで人間かい。畢竟芝居上手が人間で、己れつち見たいな不器用者は虫なんだ。》（定稿）

これは、尼の説教の、「神が人間を創つて魂を入れたのだから人間は善と悪との区別が出来なければならない」という重要な骨子を踏まえて語り手・ヤコフ・イリツチの吐き出すセリフであるが、「人間」階層の狡猾な欺瞞性に対するこの端的な糾弾は、やはり、二稿には見られないものである。これに対応する二稿のセリフは次のとおりである。

《義理人情が人ツ、糞でも喰へと一口には云つたもんだが、夫れが出来りやナ、己ツちだつて物の二万や三万は溜めて居らア。》

定稿のヤコフ・イリツチの「人間」階層告発の心意気に對し、この二稿における吉のセリフには、「虫」に徹しきることできない己れの人間的良心を自嘲的に輪晦しながらも、それを冷淡に捨て置けることもできないままに陥る感傷的ナルシズムが覗きかけているのである。

さらに、この部分で見落せない重要な事項として、説教開催の責任者が「耶穌」から「工場長」に代えられていることが挙げられる。

《野郎が難有い事を云つたつてかんかん虫手合ひは軒をかくばかりで全然補足になら無えつてんで、工場長開けた事を思ひつきやがつた、女ならよからうてんだとよ。》（定稿、傍点引用者）

老獪な技巧を用いる「芝居上手」の欺瞞的な特徴を「工場長」に持たせたこの改稿は、労働者を「日頃虫扱ひに碌々喰はせも」せず、己れ自身のみ、「旨い汁を嘗めつこ」する工場経営者の非人間性を拡大していく大きな力になり得たと

いえよう。その結果、工場の会計・グリゴリー・ペトニコフの絡むイフヒムとカチャの恋愛劇には、社会的不合理を裁く社会劇的要素が有機的に交錯し、官憲宗家、資産家に向けられる有島の批評精神は、拡散の弊を免れるのである。

第三は、象徴的な象風景に託された告発姿勢の変化である。

二稿においては、「蠅」の描出が二箇所に見られる。最初は、「這ずつてる蠅」の「暑さにも弱げずにピンピンした」状態に「虫」階層よりもまじな生活状態を捉える場面であり、次いで、「舷に当つて」折返す大波に「クルリと凌」われる蠅の死を捉えた場面である。これに對し、定稿においては、最初の場面が抹消され、後の場面のみが残されている。しかも、蠅は「甲虫」に改変されており、その甲虫の死は蠅のように無抵抗な死ではない。

《舷に当る波が折れ返る調子に、くるりとさらったので、彼が云ふ様に憐れな甲虫は水に陥つて、油をかけた緑玉の様な雙の翅を無上に振り動かしながら、絶大な海の力に對して、余り悲惨な抵抗を試みて居るのであつた。／私は依然波の間に点を為して見ゆる其の甲虫を、悲惨な思ひをして眺めて居る。》

「波」「海の力」が欺瞞性に満ちた「人間」階層の非情性を、そして、「蠅」「甲虫」が非力な「虫」階層の惨状を表わしていることはいうまでもない。「舷に当つて」「折返す」波に「クルリと」、呑み込まれる二稿の蠅の様子を、定稿において、「雙の翅を無上に振り動かしながら、絶大な海の力に對して」「悲惨な抵抗を試みる」甲虫の様子に改変する有島は、二稿におけるように、前近代的な秩序の枠組みの中で古風なセンチメンタリズムに浸ることはできなかったのである、社会的不合理に対する厳しい批評精神を働かせることも悲惨な宿運の重さをも鋭利に見通していたといえるのではなからうか。

第四は、里（定稿、カチャ）の人間的な変質である。これは、蓮田（定稿、ペトニコフ）の殺害に至る劇展開の緊張要素をも異質なものに変えている。

里は、「カンカン虫の娘たア云ひながら、箱人物」の器量よしであり、この里の恋人・富は、すべてが「気味の好い程小じんまりして、鼻筋の通つた眉頭の近い」「江戸ッ児の典型」である。つまり、この二人は似合ひのカップルなのである。これに對し、蓮田は「土左衛門」のような「ブクブクした面」を持ち、金の力で「頭から被さつて来」る男である。このような蓮田が富と里の間に強引に割

り込もうとする時、彼の悪役振りが強く浮び出てくるのは当然の結果であるが、有島はこの割り込みの力に「虫」階層の代表者・吉の複雑な二面的心情を対置しようとしている。その心情は、「親が棄をして娘が肥る程食」えるような生活への欲得と「人間の持てる金つて奴を巻上げ」ようとする報復心である。もっともこの二つの心情が吉の内面葛藤を喚び起すのではない。劇展開に緊張要素を加える吉の内的葛藤は、「当世」風に「義理人情を勘定に入れ無」い欲得と抑えようもなく働く骨肉の情愛との葛藤である。里の劇展開に加える緊張要素もこれと呼応するものであり、孝養と恋の二つの道の択一によって陥る苦しみである。「三日三晩泣き明か」し、やがて、蓮田の妾になることを承諾した後見せる里の「優しい」孝養は、前近代的な秩序の枠組みに嵌められた女の痛ましくも美しい哀感を浮び上がらせるのである。

定稿のカチャには、二稿の里が見せたような女の哀感を認めることはできない。彼女は恋人・イフヒムとの別れを彼女自身の主体的判断のもとに行うことのできる女である。

《イフヒムとカチャが水入らずになれ合つて居た間は、己れだつて口を出すものは無え、黙つて居たのよ。すると不図娘の奴が妙に齷ぎ出しやがった。

(略) 変だなど思つてる中に、一週間もすると、奴の身の周りが追々綺麗になるんだ。(略) 偶にや大層も無え、お袋に土産なんぞ持つて来やがる。イフヒムといがみ合つた様な噂もちよくちよく聞くから、貢ぐのは野郎ぢや無くつて、これはつくり外に出来たなとさう思つたんだ。》

カチャは、現実の諸状況を彼女自身の判断によって選び取っており、吉が娘・里に押しつけた「親の恩を忘れやがったか」というような古風な倫理的拘束力に悩まされることはない。つまり、カチャは里とは異なり、近代的な自我に目覚め、主体的に生きることのできる女である。

《面相だつてお前、己れつちの娘だ。お姫様の様なのは出来る筈は無えが、胆が太てえんだからあの大かい眼で見据ゑて見ねえ、男の心はびりびりつと震へ込んで一たまりも無えに極まつて居らあ。そりや彼奴だつてイフヒムに気の無え訳ぢや無えんだが、其処が阿魔は阿魔だ。矢張り老耄の生れ代りなんだ。当世向きに出来て居やあがる。》

「当世向き」で「老耄の生れ代り」の「阿魔」というのは、「色氣と決断は全然無」く「栄耀栄華で暮さうと云ふ」「欲気ばかり」の女のことであるが、こうした特性を娘・カチャに認める語り手・ヤコフ・イリイチは、欲得と情愛の二元的葛藤を、二稿における吉のように終始持ちつづけることはない。「娘の奴をイフヒムの前に突つ放して、勝手にしろと云つてくれようか。それともカチャを餌に、人間の食ふものも食は無えで溜めた黄色い奴を、思ふさま剥奪つてくれようか。」というヤコフ・イリイチの葛藤は、勿論、吉の陥つた葛藤と同質のものであるが、カチャが、里とは異なり、父親の「二まはりも三まはりも」「上手」を行く欲気に関われていることによって、彼はその葛藤から即座に解放されるのである。劇展開に伴う緊張要素は二稿のものとは当然異なつたものになってくる。

二稿における吉の欲得と情愛、里の孝養と恋愛という二元的葛藤に代る定稿の緊張要素は、ヤコフ・イリイチとカチャ親子がイフヒムの激昂を免れながら、どこまで「虫つけらで押し通し」「人間に食ひ込んで行け」るかということであり、劇展開の山場には、二稿における富の刃傷沙汰のような激情を爆発させる衝動的行為ではなく、冷静な批評眼を「人間」階層に向けるイフヒムの冷徹な人間認識を据えるのである。

《人間つて奴は何んの事は無え、贅沢三昧をして生れて来やがつて、不足の云ひ様は無い筈なのに、物好きにも事を欠いて、虫手合ひの内懐まで手を入れやがる。何が面白くつて今日今日を暮して居るんだ。虫つて云はれて居ながら、それでも偶にや氣儘な夢でも見ればこそぢや無えか……畜生。(略) 畜生。其奴を野郎見付ければひつたり、見付ければひつたりして、空手にして置いて、搾り栄がしなくなると、靴の先へかけて星の世界へでも蹴つ飛ばさうと云ふんだ。欲にかゝつてそんな事が見えなくなつたか。》

第五は、蓮田(定稿、グリゴリー・ペトニコフ殺害の意味と吉(定稿、ヤコフ・イリイチ)および自分(定稿、私)の認識視点の変化である。

二稿における蓮田殺害の凶行は、山田俊治氏の指摘のとおり「定稿のような情況を《芝居》と捉える人間認識に立脚した論理としては定着されてはいな」く、「情況の非人間性を自分の過失を通して感受した吉が、富の復讐に心情的に荷担する」という設定によって、非人間的情況を摘発す「べく形象化されているが、こ

ここに浮ぶ吉と富との連帯関係には、古風な人情劇に傾斜していく劇要素が潜んでいるといつてよからう。

《出る所に出て呉れようか、夫れとも此場去らず撲き殺して呉れ様かと思つたが、富のしよんぼりした姿を見てーと、我が折れる、仕舞には怒り上口の富も笑ひ上口の己らも、ベソをかく仕儀サ、泣上口の嬢なんざア、お前、全く絶息るかと思つた位だ。》

娘・里を富に刺殺された吉の憤怒の感情は、父親の身としては抑えがたい自然の感情であるが、「富のしよんぼりした姿」は、その憤怒を喚び起す吉の「我」を折り、やがて、吉と富の二つの心を融和の方向へ引き合わせている。こうした力は、勿論、富の一時的な外形の力によって作り出されたものではない。有島はその姿の奥に、吉の宥恕を誘うだけの共通的な精神基盤を注意深く用意しているのである。富は吉と同じく「字は読め無」い貧しい「かかん虫」の階層である。そして、吉は、里の妾話を聞きつけて「狂人見躰」に激昂する富の抗議に対し、「些度物には理解を付けねー、当世はね、金のある所に玉が寄るんだ、夫れが当世ツてんだ、篋棒奴」と詰り返しながらも、彼自身、欲念の下から頭を拾げる人情の痛みを噴まれつづけていただけに、富の一途に思いつめる愛の痛みは、己れ自身の心の痛みとして深く理解できているのである。

有島は、このように、同等の階層性と人情の痛みを基底にして二つの心の融和を図っているが、この企図には、前近代的な秩序を容認した枠組みでの人情味と社会の構造的不合理を裁く近代的批評精神とが不透明に融合していく危険性が潜んでいるといえよう。有島の批評精神が明確に機能するにつれて、この危険性は次第に顕在化することになるが、定稿の有島はその危険性を的確に見通し、前近代的な秩序の枠組みの中で起伏する人情味は除去しながら、近代的批評精神に裏打ちされた階層性を強く打ち出そうとしていくのである。

対極的な時代精神の不透明な融合という危険性を持った二稿の象徴的欠陥は、有島の現実次元における古風な生活意識と新たな時代精神を担う(注15)ゴリーキー文学との性急な結合に大きな原因があるといえるのではなからうか。ここで、改稿背景としての生活と思想に注目してみたい。

三 改稿背景としての恋愛と思想

『かかん虫』の執筆時期までに有島が思いを寄せた女性といえ、河野信子、フアニー、リリー、テイルダなどを挙げる事ができるが、二稿における『センツアマニ』（ゴリーキー）の受容とか前近代的な秩序の枠組みによる人情劇の構築には、有島の妹・愛子と親友・増田英一との恋愛が深く関りを持っているものと考えられる。

ところで、愛子と増田英一との恋愛は、別離の宿運を背負った道ならぬ恋である。有島が増田から愛子への思いを告白された時、愛子はすでに山本直良と結婚しており、しかも、二児の母親でもあったのである。愛子も増田に思いを寄せていたことは、彼女自身の生活表情からして明らかである。

《山本氏に愛子を訪うた。女の中最も尊く清きものは彼女である。本当に水晶の様な所がある。僕は彼女と語る時、他の塵に着けるものを忘れて高い喜びと清い悲しみとに入ることが出来る。二人の涙源に話題が及んだ時は、真に一種の強い運命の手を感じずには居られない。彼女は彼が病にありはせぬかと頻りに心配してゐる。僕は堪らない。／僕は真に神を思ふ。神の聖なる審判を思ふ。》（明治36・2・17、日記）

有島は、当然、二人の中に入り何らかの措置を講じなければならなかったのであるが、これは『かかん虫』の里と富の間に割り込む吉と蓮田の造形に大きな影響を与えているものといえよう。

《この夜増田兄の飛信来りぬ。披き見て驚倒、なす所を知らず。彼は余が彼に送りし手紙を見て、我が愛子の病まざるを知り、余に書を送りて、彼女その恋を捨てたりと云ふなり。余は此の如き語を彼に許す能はず。彼が毎時の失望苦衷は彼をして此失言あらしめしならん、然かも余は此の如き語を彼より聞かんよりは、余の愛妹の死を見ん事の如何によるべきぞ。寧ろ彼の手親ら余を殺さん事の如何による可きぞ。愛子若し彼女の恋捨てなば世には恋なるものある事なし。一つだにある事なし。余の心には憤なき能はざるなり。／嗚呼、地上の人一人だに余が真愛を知らず。》（明治36・5・3、日記、傍点引用者）

この日記内容から推定できることは、有島は、愛子と増田の二人に真剣な深い

愛を認めながらも、兩人をはじめ周囲のあらゆる人達に及ぶ災禍を慮り、「愛子の病まざる」ことをもって増田の激情を鎮めようとしたということであり、しかも、結果的に、増田の大きな誤解を招くことになった有島は、思いがけない懊悩に陥らねばならなかったということである。

《嗚呼、余の兄の爲めに計りてなせし所のものは是れ却て兄を陥る可陥棄なりしか。彼女の健康を維持したるものは余なり。あらず、彼女の漸次に衰退し行く健康を若干なりとも拒止せんとせしものは余なり。常に涙の中にありし彼女を若干なりとも笑ましめんとしたるものは余なり。而して余の爲したる所は誤解を彼に醸さしめぬ。(略)あ、余は凡てを彼女に告ぐ可きか、而して彼女を悲しましめ、苦しましめ、病ましめ、而して死なしむ可きか。》(明治36・5・8、日記、傍点引用者)

人妻となり、すでに二児を儲けている妹・愛子の恋愛は、敬虔な信仰の徒・有島にとっては重い罪苦を喚ぶものではあったが、また同時に、深い同情を誘うものでもあったことを見落してはならない。

《東方の涙源を思ひては唯苦しき嘆息のみ唇に上る。嗚呼我如何にすべきぞや。彼の痛める胸を以て拭ひ得べき。恋は全く二つに裂かれて、再び相会はざる可く相距りたる地上に置かれぬ。神も遂に之れを結び給はざるや。さらば是れ彼と彼女との永遠の運命か。》(明治36・3・5、日記、傍点引用者)

誠実温雅な有島は、「全く二つに裂かれて、再び相会はざる可く相距りたる」彼等の不幸を、やがて、己れ自身の責任として受けとめ、重い罪意識を背負うのであるが、その苦悩は測り知れない深さを持っている。

《余は彼等が失はれた恋の上に美しき塔を築くを見て、世にあるもの、中最も美なるものを得んとしたりき。而して余一人の愚の爲めに恋は終に破れ去りしが如し。愚者よ、愚者よ、汝は永久に呪はる可きものなるかな。》(明治36・5・8、日記、傍点引用者)

《彼は其半生の精進を凡て無に葬り、自ら世を退き合衆国の南方に退きて一窮農たらんとするなり。神聖なる祭壇に燃されたる火の、空しく消えて一抹の死灰を残せる如き彼の心事惨ましからずや。凡ては余の罪なり。余の少情は余を駆りてかくの如き結果に到らしめぬ。余は出来得る丈けを彼より奪ひぬ。今は

何を以て彼に与へ得んや。》(明治36・9・21、日記、傍点引用者)

「再び相会はざる可く」運命づけられている愛子と増田の道ならぬ恋の悲運とそれを招いた「呪はる可き」罪の自覚を持つ有島の懊悩は、二稿における里と富の純一な愛と彼等の悲運を招いた吉の罪科と苦悩を支える重要な形象モチーフになっているといえるのではなからうか。社会の構造的な不合理を裁く近代批評精神を覗かせながらも、前近代的な秩序を容認した枠組みの中で繰り広げられる義理と人情との葛藤劇は、愛子と増田の悲恋と己れの罪苦とを感情過多な感傷性のもとで拡大化していくところに生れたものといつてよからう。

ところで、哀しい道ならぬ恋に落ちていった愛子と増田の別離の悲運を己れ自身の責任として背負わねばならなかった有島が、その罪意識に新たな解放の道を開くことのできたのは、フレンド精神病院の患者・スコット博士の悲劇性に直面した時の思想的整理によるものと考えられる。

《余に一人の弟あり、(略)約三ヶ月前後の一友余に書を致して、彼の事業失敗し、彼は困難と戦ひつゝありと報じ来りぬ。余は此時適當の処置を彼の爲めになすべかりしなり。されども彼自身の書には左程までに事逼れる様子は報せられざりしが故に、余は其儘に打捨て置きぬ。而して一日突然彼が自殺の悲報に接せし時の余が驚駭と苦痛とを察し給へ。かくて後、神余を罰し給へるならん。余は余に来る患者に、極めて安全なる薬剤を調するにも、極めて平易なる手術を施すにも、一方ならぬ恐怖を覚ゆるに至りぬ。》(明治37・8・17、日記、傍点引用者)

これは、事業に失敗した弟の自殺が「適當の処置」を怠った自分の所為であるとして、重い罪意識に陥っていくスコット博士の悲劇的様相を紹介したものであるが、他者の不幸を自己の責任に直結させ、そして、運命予定説のもとで悲惨な懊悩に落ち込んでいくスコット博士の精神構造は、そのまま有島のものである。

スコット博士に永遠の呪詛を確信させた或る牧師に対し、「図書館の塵の中から引きずり出して来た貴様の神学は、一人の人間を狂気に誘ひこみ、死に陥れようとしてゐるのだぞ。冷やかな言葉で行ふ殺人犯」(迷路《首途》)という怒りをぶつけながら彼の運命予定説を否定していく有島が、「意志の絶対自由」(同)を心中に凝視しはじめるのは必然の帰結である。

二稿において、富と里との純一な愛を十分承知しながらも、「親が妾をして娘が肥る程食やア、生きるが者はある」という欲得を「義理人情を勘定に入れ無えのが当世」という時代風潮で正当化し、里を妾に売り出す吉の行為は、「意志の絶対自由」を切り札にして神から離反した有島が、「無限の自己責任」（迷路

《首途》）を自覚しながら自己回復に着手していく第一歩ではなかったろうか。

キリスト教徒としての使命感を支えにしたフレンド精神病院における看護生活を「殉情的な夢の二箇月だった」（同）と規定した後、「僕は是れからは今までやうにセンチメンタルであつてはならぬ。自己を安価に弁護してはならぬ。蹉跎を恐れてはならぬ。善悪醜美——僕のあらゆる力を集めて如実に生活して行かう。僕はもつと自由に、もつと厳肅にならねばならぬ。」（同）と決意する有島にとって、哀しい道ならぬ恋に落ちていった愛子と増田の別離の悲運は、義理と人情との葛藤を劇軸とする古風なセンチメンタリズムによって彩ることはできず、また、安価なヒューマニズムとか傲慢な使命感によって処理し尽くすこともできないものになっていたといえよう。この自覚が明確になるにつれて、有島は、^{注(18)}ホイットマン、^{注(19)}ゴッリーキーなどの新たな思想の吸収に拍車をかけることになり、そして、愛子に対する「痛切なる疑惑」（明治36・9・21、日記）によって傷心し、「半生の精進を凡て無に葬り、自ら世を退き合衆国の南方に退きて一窮農たらん」（同）としていた増田の悲痛な思いとかその思いのうちにも「毀たで残し置」（同）く友愛とか、さらには、有島自身の「凡ては余の罪なり」（同）として重ねる苛酷な自己譴責などに新たな生の意味を付与していかなければならなくなったものと考えられる。ここで、古風な感傷的美化を超越していく思想的背景に注目してみたい。

《彼はKの演説に感動させられた訳ではなかった。彼はKの言葉の中に煽動者の常用する空虚な表現のある事を直感してゐた。然しそこに集まつた人達は、一人々々奥深い背景を持つてゐる事を彼に思はせた。（略）演説中互に激しい言葉でいひ罵つてゐたものも、今は手を取り交はして打解けてゐた。彼は始めてこゝに力になり合つてゐる労働者の群を見た。而してその後ろには大きな実生活といふ大事のある事を深く感じた。彼等の親しみは、主義から来たものでなく、趣味から来たものでなく、生命の根柢を形造る生活の必要から来たもの

だと思ふと、彼は人の心の土台を手の平で撫で、見るやうな気がした。》（迷路、傍点引用者）

これは大正六年十月に発表された『迷路』の中の一節であるが、この作品の主人公・Aの思想的傾向と『迷路』のKなる人物のモデル・金子喜一との交遊が現実に持たれた明治三十八年当時の日記の思想的傾向を対比してみる時、そこには、判然とした差違が認められるのである。この差違は、有島の思想的変容の様を表わすものとして重要な意味を持つものといえよう。

《夜金子君と共にボストンなる社会主義者の集會に到る。広額張口の大漢「酒売業」に対して一場の講話をなす。云ふ所一一実験の声、余は同情と興味とを以て聞けり。実に種々雑多なる人集まれり。余は彼等の面貌を熟視して快に堪へざりき。彼等の或者は小兒の如き純潔の相を備へたり。而して同時に余をして痛切の思をなさせしめしは、幾多の明確なる criminal type を彼等の中に見出でたる事なり。》（明治38・1・1、日記、傍点引用者）

明治三十八年一月一日夜、社会主義者の演説會に出席した有島が集まる聴衆の「面貌を熟視して快に堪へ」なかったのは、そこに「小兒の如き純潔の相」を見ながら外ならないが、この時の有島は、「快」の感情と同時に「痛切の思」をも感じ取っている。それは、そこに「幾多の明確なる criminal type」を見出したためである。その「痛切の思」を感じる有島には、聴衆全体との温かな連帯を認めることはできない。これに対し、『迷路』の主人公・Aは、演説會に集まる聴衆の姿に「打解け」「力になり合つてゐる労働者」の連帯の姿を発見すると同時に、その背後にある「人の心の土台」をも感受しながら「涙」しているのである。ここには、Aの聴衆全体の生に対する深い共感を捉えることができる。

前近代的な秩序の枠組みに嵌められた女の哀感を噛みしめる里と「当世」風に「栄耀豪華で暮さうと云ふ」「欲気ばかり」のカチャとの差違とか、あるいは、^{注(20)}「最後まで事件とは関わらない人物として造形されている」「自分」と「へかんかん虫」をへ仲間と考える「私」との差違など、すでに見て来た二稿と定稿との本質的な差違は、すべて、この『日記』と『迷路』との間に認められる有島の労働者階層の生に対する共感の深さの差違に直結しているといえるのではなからうか。

改稿背景としての思想の考察にあたり、『迷路』における有島の、労働者階層の生に対する共感と、彼等の連帯が主義や趣味によって生じたものではなく「生命の根柢を形造る生活の必要」から生じたものであるという認識は、とりわけ重要な意味を持つものといわなければならない。キリスト教徒としての使命感を支えにしたフレンド精神病院における患者への愛の奉仕も、主義に支配された生に外ならなかったものであり、また、愛子と増田との道ならぬ恋の間に入って講じた有島の措置とか、あるいは、それに伴う非意識も同様なことが言える。

愛子と増田の道ならぬ恋と有島の講じた措置と、そして、それに伴う非意識を、キリスト教徒としての潔癖な倫理意識から解放し、「生命の根柢を形造る生活の必要」性に根ざした内的衝迫の活動として捉えなおすためには、前近代的な秩序の枠組みでの人情劇とか甘美な浪漫性は、当然払拭しなければならなかったものであり、有島のゴリーキーへの共感が、『センチアマニ』の世界から『オルロフとその妻』の世界へと移行していったのは、必然の帰結である。二稿から定稿への改稿は、この移行過程においてはじめて成立したものと見えるのではなからうか。《心理描写は、読者をして、この夫婦が真実生きて居たのであり、誰か、普通人以上の洞察力を持つてゐるものが、夫婦の心の奥底に隠れて居てあれ程緻密に観察したのだと思はれる程深いものがある。又著者の不偏の同情も驚くべきものである。彼は誰も害しない。主人公も女主人公も読者も。読者の為に、彼等の欠点を、著者は臆面なく描き出す、と同時に彼等の長所美点に対する著者の無限の同情は、読者をして彼等の生活を羨ましく思はせる程である。》(明治41・2・15、日記、傍点引用者)

これは、『オルロフとその妻』の読後感を記した日記の一節であるが、ゴリーキーの「普通人以上の洞察力」と「不偏の同情」と「無限の同情」は、キリスト教徒としての倫理意識から己れを解放し、自然な内的衝迫を見定めていこうとする有島の重要な武器になっていたと見ることが出来る。

キリスト教を離反し、「常識といふ低級な尺度」(明治40・3・23、日記)を捨て、鋭利な洞察力と広汎な同情心をもって人間の自然な内的衝迫を見定めていこうとする有島の前途は、けっして容易なものではなかったはずである。ホイットマン、カウツキー、ゴリーキーなどへの傾注は、自家の農場経営の抱え持つ不

合理とも対決しなければならなかった有島にとっては避けられない思索対話であり、明晰な多元的思索家・有島の前に、無限の反指定を宿すものであったといえよう。

《人の発達の為には、完全に同等な立場におかれた人々の間の、広汎にして自由な交渉のある事が必要である——この状態はたゞ社会主義によってのみ保証せられ得るものである。かうした各人間の交渉は各自に与へられ、実際はさうでないにしても、経験の平等が、理論上は平等に与へられるであらう。それは凡ての人を互ひに理解せしめる。》(明治41・2・25、日記)

ゴリーキーの「宗教と社会主義論」の読後感として整理されているこの思想内容と「小作者とは実に憐れむ可き階級なり。彼等は服従の外の何者も知らず。余は彼等の丁寧な余に礼するを見て殆んど逃げんとするに至りぬ。同じく是れ人而して一は彼の如く一は此の如くなる所以は何ぞや。是れ人類最終の理想ならんや。余等と彼等と相共に住む可く世は造られたり。相隔りて住む可きにはあらざるなり。」(明治36・6・25、日記)という有島の生活実感とを照応させてみる時、社会の構造的な不合理と対決するための有島の思想的武装は、単なる観念的な知識武装ではなく、日常次元の具体的な問題意識に裏打ちされた誠実な批評精神を機軸に形成されたものといえることができる。

むすび

道ならぬ恋に落ちた愛子と増田の哀しい宿運の愛と有島の仲介的措置と、そして、それに伴う重い非意識を、ゴリーキーのロマンティックな『センチアマニ』の世界に乗せて甘美に描き上げようとした有島は、対極的な時代精神の不透明に融合する内部矛盾に直面しなければならなかったものであり、この解消を図る有島は、社会の構造的に厳しい批評精神を働かせながら、「生命の根柢を形造る生活の必要」性より生じた内的衝迫の解明へと向ったのである。二稿から定稿への改稿は、この時点においてはじめて成立したものであり、これは、『センチアマニ』のロマンティックな夢想から『オルロフとその妻』のリアリスティックな凝視へと移行する有島の認識姿勢を示すものである。

この移行は、それまで有島の認識視座に大きな位置を占めていた、痛ましい女

の哀感をもろに背負う古風な妹・愛子の影を薄れさせ、有島の胸底にあるもう一つの悲恋の女主人公・佐々木信子の奔放な生の姿を次第に浮び上がらせたといえよう。それは、二稿の里から定稿のカチャへの変貌を促す大きな力になっている。勿論、この移行過程には、キリスト教を離反した有島自身の情念が複雑に交錯していることは言うまでもない。

《僕は聖者になるには余りに人間の欲情を持ち過ぎるし、凡人になるには余りに潔癖過ぎる。僕の生命は原始的な純一さを持たずに、文明の病毒を受けて何時でも二元に分解されてゐる。これが憤られ、悲しまれる。然し僕は恐れない。僕は自己の分解を徹底させる。掘り下げて掘り下げて遂に個性を見失ふか、又はそこに不壊の金剛土を見出すか、二つに一つだ。》(迷路)

生の普遍的理念を根源的に問い糾しようとする主体的な認識志向とその思想化を果そうとする鋭利な知性と理念の実現化に向う誠実な実践志向と、そして諸種の状況を慮る鋭敏な感性を兼ね備えた有島は、過剰な理解力を駆使しながら人間内部の深淵と社会構造の奥行きに眼を凝らし、堅牢な生の基盤と燃焼する命の昂揚を検証しつづけたといえよう。『カインの末裔』『石にひしがれた雑草』『或る女』へと続く有島の壮大な認識軌跡は、『かかん虫』の改稿を起点としてはじめて可能なものであったといえるのではなからうか。

〈注〉

- (1) 〈有島武郎〉(一九六六、明治書院、五八頁〜五九頁)
- (2) 〈有島武郎論〉(一九六七、明治書院、九一頁)
- (3) 山田俊治氏は「かかん虫」の形成過程試論(一九七七、日本文学24、一三三頁)において、すでに同様の指摘をされている。
- (4) 原典の確認を終えていない現時点としてはどこまでも仮説であるが、森鷗外の訳を通して見る限り、強い類似性の認められることは確である。
- (5) 〈十月の創作界〉(一九一〇、早稲田文学—角川文庫「カインの末裔」一九七七、角川書店、二二六頁所収参照—)
- (6) 〈「白樺」派の文学〉(一九五五、講談社、一九〇頁)
- (7) 注(1)書、六一頁。
- (8) 菊田茂男へ芥川龍之介「運」の典拠—「今昔物語」及び森鷗外訳「センツアマニ」との比較研究(一九五九、国文学学燈社、一三七頁)。

- (9) 〈近代文学研究資料叢書(4) 有島武郎未刊原稿かかん虫他二編〉(一九七三、日本近代文学館、八三頁)

(10) 注(3)の論文において、「凶行に至る経緯を物語る吉の現在の心情的位置が明らかにされ」ている二稿に対し、定稿のヤコフ・イリツチの場合は「吉のような過去の痛みを伴わない」「へ論理」によって凶行に結びつけられていること、そして、これに伴うプロットの変更とかカチャが「里とは全く異質な女」に改変されていること、また、二稿の聞き手・「自分」が「最後まで事件とは関わらない人物として造形されてい」るのに対し、定稿の聞き手・「私」は「へ一種の恐怖」ではなく「恐ろしい期待」を凶行に抱く人物であり、「へかかん虫」をへ仲間と考える「人物になっていることなどの指摘がなされている。

(11) 勿論、皮肉をこめる吉の心情を見落してはならない。

(12) 山田俊治氏がすでにこのことに着目されている。注(10)参照。

(13) 「あれ程の容色にべらべらしたもんでも着せて見たいが親の人情」とある。

(14) 注(3)論文。注(10)参照。

(15) 娘・里を殺害した富を恕す吉の心理の形象過程には、『チェルカッシ』の終末部の強い影響があるものと考えられる。金の分け前を「貪欲に」「卑劣に」哀訴するガヴリーラに紙幣を叩きつけて満悦するチェルカッシは、その後、自分の存在性を蔑視したガヴリーラの殺意を聞かされて立腹し、皮肉な嘲罵とともに金を奪い返すことになるが、それは素朴なガヴリーラの激昂を誘い、思わぬ事態を惹き起すのである。この事態の中から、やがて、二人の心が融和に向っていく経緯は、有島の心を強く捉えたのではなからうか。

(16) 増田英一。

(17) ホイットマンの影響のもとに作品化した最初のものとしては、『老船長の幻覚』が挙げられる。ホイットマンの『大道の歌』の影響を強く受けた『老船長の幻覚』の形象性については、拙稿「老船長の幻覚」論—悲劇性の原拠—(岡山県立短期大学研究紀要第二十五号、一九八一、七)において触れたことがある。

(18) 社会主義思想の吸収面では、「空想より科学へ」(エンゲルス)、「社会主義共和国」(カウツキー)などの読書歴も見落すことはできない。

(19) 注(3)論文。

(20) 『或る女』で、大きな命に成長す。